2020（令和２）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　　生物産業学研究科
学部長・研究科委員長名　　塩本　明弘
学科名・専攻名　　生物生産学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	専門学習のために：特論科目の開講、研究の立案、実施、考察、文献検索など修士論文を完成させるために：特別総合実験・演習科目を開講。 プレゼン能力や文章記述能力を強化する科目を開設している。	モチベーションの向上：研究成果ポスター発表会と表彰。 対話による刺激：演習的授業を工夫。 新しい知識の刺激：外部講師を招聘する（本年度２回実施）。 外部からの刺激：学会発表参加を促し学外交流を奨励した。	科目ごとに授業記録を取る。 シラバスとガイダンスにおいて評価基準を明示する。	ポスター発表により指導教員以外の専攻の複数指導教員が修士論文の進行程度を把握する。 専攻内の論文発表会、研究科全体での修士論文要旨のチェック、修士論文発表会、指導教員および他の指導教員による修士論文の査読	授業評価アンケートの実施 授業改善計画の作成と提出 毎年度のシラバス作製時の科目内容の改善 修了時アンケートの実施と集計 研究科における FD 委員会において研究科共通科目の見直し（科目の統合）を行った。学則改訂済。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・学科の専門知識をベースに、修士課程で生物産業を文理融合の教育体系から学ぶことができる。	【長所】 知識を吸収する意欲を持続させ、地方にいながら世界に通用するレベルと意識をもたせる。	【長所】 教員による一方的な評価に陥らない。 学生にとっては努力に見合った評価。	【長所】 指導教員によるきめ細かい指導。 専攻内の他の指導教員による状況把握	【長所】 学生の授業評価は高い。 各授業担当者の工夫
	【特色】 ・雄大な自然を有するオホーツクにおいて、バイオテクノロジー、動植物生産、生態系保全を高度に学ぶことができる。	【特色】 少人数きめ細かい指導	【特色】 特になし	【特色】 修士論文英語要旨を１つの論文につき５人の指導教員が査読し、コメントを記録。本人にフィードバックしている。	【特色】 高い満足度 高い授業出席率
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 外部講師の依頼は個々の教員に委ねられており、毎年の講師数は変動する。	【問題点】 特になし	【問題点】 きめ細かい指導は、教員の負担も増加する。	【問題点】 なし
	【課題】 ・学生の学習志向を尊重しながらも多様な分野を指導し、満足度を得ること。	【課題】 特になし。	【課題】 特になし	【課題】 教員の負担軽減（業務集中の分散）	【課題】 学期ごと教科毎の内容見直しと更新。 見直しを行った科目の効果を検証する。
根拠資料名	学習の手引き、講義要項＜シラバス＞	成果発表会のポスター 授業記録、外部講師依頼書類 授業評価	授業記録 研究科委員会会議資料	大学院修士論文発表会要旨集 修士論文	学習の手引き、講義要項＜シラバス＞ 授業評価アンケート結果。

2020（令和２）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	定められた試験制度の適切な立案と実施 試験日程は事前に専攻主任会議、研究科委員会に付議され承認された後に公示する。 受験希望者は必ず指導教授（予定者）と事前に面談し、受け入れ方針や入学後の研究計画等について確認している。 指導教授と大学院授業担当者による学科試験問題（外国語・専門科目）の作成。指導教員全員による口述試験を行い、公正に入学者を選抜している。 研究科で統一した合否基準を設定し、専攻での合否判定を踏まえ生物産業学研究科委員会において最終的な合否判定をしている。 入学試験問題は公開する。 入試科目名を点検し、専門科目２科目の入試科目名を変更した。	内部（本学部）学生については受け入れ指導教授における進学の意思確認と適性の判断。 外部（他大学または留学生）学生については受け入れ指導教授における事前説明と適性の判断。 専攻主任による確認。 本年度においては、学外から外国籍の志願者はいなかった。 指導教授全員による口述試験における学生の進学の適性判断。 指導教授全員による修士論文の回覧と審査により、学生の到達度レベルの判定と受け入れに対するフィードバック。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 学生が指導を受ける指導教授が中心となって学科試験問題を作成するので、より専門的な内容の理解を問うことができる。 外国語に関しては複数人により問題の難易度を判定している。 専門科目の入試科目名の変更により、受験者が専攻において必要な知識をイメージし易いように考慮した。	【長所】 なし
	【特色】 口述試験では様々な専門の指導教授があたるので、受験する学生の幅広い知識やコミュニケーション能力をみることができる。 外国語試験に関しては、適切なレベルを維持した出題である。	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし。	【問題点】 なし
	【課題】 なし。	【課題】 なし
根拠資料名	研究科委員会会議資料	卒業時アンケート結果（研究科委員会会議資料） 修士論文 研究科委員会会議資料

2020（令和２）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	□　つなげている ☑　一部つなげている □　つなげていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	研究科及び専攻ごとに編制方針を定め、これを専攻主任会議及び専攻会議等にて全構成員に周知している。 外部には、教員募集の際に本方針を踏まえた内容を大学ホームページに掲出している。 植物資源生産学分野と動物資源生産学分野	大学院設置基準及び学内の教員枠を踏まえ、方針に基づく教員を配置している。 専攻内は２分野体制である。 植物資源生産学分野と動物資源生産学分野 指導教授は植物資源生産学分野 6 名、動物資源生産学分野４名である。	教員の採用は一般公募とし、大学のホームページにて募集している。 本年度の教員募集は、なかった。 授業担当者１名を採用した。 専攻主任と専攻指導教授による人事検討会議を複数回実施し、人事計画を立案した。	大学全体でアンケート形式による自己教育評価と学生による評価（授業・研究室）を毎年度実施し、これをフィードバックするとともに、特に改善を要する事項については、改善計画書を求めている。 依命国外留学制度の利用を呼び掛けたが、世界的な感染症（COVID-19）流行に伴い申請が出なかった。	専攻における人事計画（指導教授や指導准教授への昇格･採用等）を専攻主任が中心となって立案し、これを専攻における指導教授会議の中で確認・共有している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 公募により意欲的な人材採用が可能。 指導教授間で昇任対象者の情報を共有することで、公平性が保たれている。	【長所】依命国外留学に関しては、 教員の質の向上　国際交流の活性化が期待できる	【長所】 専攻内の指導教授間で共通認識を得ている
	【特色】 オホーツク地域の特色・強みを活かすことのできる業績・考えを持った教員であること。	【特色】 学科の各研究室から進学した学生の修士論文作成に対応可能。	【特色】 資格審査委員会により、多岐にわたる専門性に対応できる審査を実施している	【特色】 1 年間の海外で研鑽を積むことにより、教員のスキルアップにつながる。周囲への波及効果が期待される。	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 基礎学科で学んだ知識を深めるために、基礎学科授業担当教員全員を大学院授業担当にすべきである。	【問題点】 組織としてバックアップが必要。 留学者の元の所属場所の業務量増加	【問題点】 特になし
	【課題】 なし	【課題】 専攻の分野変更を視野に検討を始める。	【課題】 なし。	【課題】 可能ならば１年間の臨時雇用などの対策	【課題】 R3 年度の人事構想を進める。
根拠資料名	研究科及び専攻の編制方針 教員募集に係る大学ホームページ 学修の手引き　講義要項＜シラバス＞	大学院案内 学修の手引き　講義要項＜シラバス＞ 専攻内会議の資料（非公開）	資格審査委員会資料 専攻内会議の資料（非公開）	自己教育評価のアンケート 授業・研究室アンケート	大学院案内

2020（令和２）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　　生物産業学研究科
学部長・研究科委員長名　　塩本　明弘
学科名・専攻名　　アクアバイオ学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	専門分野への学識を深めるため、２つの分野（オホーツク水圏環境学分野、オホーツク水産生物学分野）を設け、それぞれに必修科目を設定している。科目の内容と順次性を考慮した単位を設定している。研究の立案、実施、考察などを実施して修士論文を完成させるために特別総合実験・演習科目を開講している。	年１回、研究成果のポスター発表会を実施している。 外部講師の招聘や学会発表の機会を設け、外部からの刺激を受ける機会を設けている。 教員のみならず、学生同士も議論できる講義を設けている。	シラバスおよびガイダンスにおいて評価基準を示し、科目ごとに授業記録を残している。 シラバスにのっとり、適切に単位を認定している。 学位授与は、学位論文ならびに専攻内における発表会を行い、総合的に判断して授与している。	毎年実施しているポスター発表会で、専攻の教員が修士論文の進行状況も含めた学習成果を把握している。 各科目の担当教員が適切に指標を設定して把握し、単位認定を行っている。 専攻内発表会において専攻の教員が学習成果を把握している。	教育課程及びその内容、方法の適切性について、個々の教員が学習成果の把握結果を元に点検・評価を行っている。 授業評価アンケートを実施し、個々の学生の状況を把握した上で、成果の測定の改善に取り組んでいる。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 豊饒の海、オホーツク海を目の前にし、座学を実体験として学び、分野の特性に合わせた学びができる	【長所】 自身の研究内容をまとめ、発信する力のトレーニングとなる。 学生同士、自身の研究を鑑みながら、異なる研究を知る機会がある	【長所】 なし	【長所】 専攻の教員による修士論文の進行状況の把握 異なる分野の教員からの意見を聞ける	【長所】 なし
	【特色】 水圏に関わる生物学的・生態学的・環境学的特性に関する専門的知識の修得	【特色】 学生同士が議論できる	【特色】 なし	【特色】 学生の研究状況を各教員が把握しているため、指導教員以外の教員からの意見を聞ける	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 学生によっては、フィールド調査等と授業が重なることがある	【問題点】 成績評価の客観性や厳格性を担保するための措置に関して明確な基準が無い	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし。	【課題】 成績評価の客観性や厳格性を担保する基準作成が必要である。	【課題】 なし	【課題】
根拠資料名	学修のてびき・講義要項＜シラバス＞	成果発表会のポスター 授業記録	授業記録	修士論文	学習の手引き、講義要項＜シラバス＞ 授業評価アンケート

2020（令和２）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	学生の受け入れ方針に基づき、学生募集方法及び入学者選抜制度適切に整備し、指導教授全員による口述試験を実施するなど、入学を希望するものへの合理的な配慮に基づく公平な入学者選抜を実施している。 受験予定者には、事前に指導教授（予定）と面談を行い、入学後の研究計画等について相談をおこなっている。 試験問題（外国語・専門科目）の作成は専攻の指導教授、大学院授業担当者が行い、口述試験は全指導教授により実施し、その結果を踏まえ、全指導教授の合議のもと、公正に入学者を選抜している。	学生受け入れの適切性について、専攻で受け入れた学生の学習成果を元に点検・評価を行っている。また、その点検・評価結果に基づき、学生受け入れの適切性について改善に取り組んでいる。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 口述試験では専攻の全指導教授であたるため、受験する学生の幅広い知識やコミュニケーション能力を評価することができる。	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし。	【問題点】 指導教員による指導学生の学習成果の点検・評価は行っているが、専攻内教員の中での情報共有という点でやや不足である
	【課題】 なし。	【課題】 現状分析のための手法、点検・評価そして改善までの仕組みを構築する必要がある。 専攻内教員による学生の情報共有できる仕組みを構築する必要がある。
根拠資料名	研究科委員会会議資料 東京農業大学大学院募集要項 東京農業大学大学院ホームページ	

2020（令和２）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑ している ☐ 一部している ☐ していない	☑ している ☐ 一部している ☐ していない	☑ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☑ 一部つなげている ☐ つなげていない	☑ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する現状説明	アクアバイオ学専攻として求める専門分野に関する能力や教育に対する姿勢を、教員募集の際に大学ホームページに掲載して、応募してきた候補者から教員を選抜している。	大学院設置基準及び学内の教員枠を踏まえ、方針に基づく教員を配置している。 専攻内は 2 分野体制（オホーツク水圏環境分野、オホーツク水産生物学分野）である。	教員の採用は広く一般公募とし、大学のホームページにて募集している。 採用にあたっては、専攻による選考試験のほか、資格審査委員会において専門性と職階による教育研究業績基準に照らし合わせた厳格な審査を実施している。	大学全体でアンケート形式による自己教育評価と学生による評価（授業・研究室）を毎年度実施し、これをフィードバックするとともに、特に改善を要する事項については、改善計画書を提出している。	専攻における人事計画（指導教授や指導准教授への昇格･採用等）を専攻主任が中心となって立案し、これを専攻内で確認・共有している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 オホーツクの水圏を意識した研究活動のできる業績・考えを持った教員であること。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 安定的な専攻運営を行う上で、指導教授の人数が不足気味	【問題点】 基礎学科の中に、大学院授業に関わっていない教員が複数いる	【問題点】 FD の組織的な活動が不十分である。 依命留学制度が利用されていない	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 基礎学科からの指導教授ならびに指導補助教員の人数を増やす	【課題】 大学院運営に関われる教員数を増やす	【課題】 大学院における FD 活動の活発化 依命留学制度を利用しやすい環境作り	【課題】 適切な根拠に基づく点検と改善を行う。
根拠資料名	教員募集に係る大学ホームページ	大学院案内 学修の手引き　講義要項＜シラバス＞	教員募集に係る大学ホームページ 資格審査委員会資料	自己教育評価アンケート 授業評価アンケート 修了時の研究室アンケート	なし

2020（令和２）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　生物産業研究科
学部長・研究科委員長名　塩本　明弘
学科名・専攻名　食品香粧学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	□　講じている ☑　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	□　行っている ☑　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	香粧品と食品に関する最新の知識を教授するため、トピックスを交えた特論科目を配置している。 コミュニケーション能力を養うための学会発表法を教授する科目を開講している。研究の立案、実施、考察、文献検索などを実施して修士論文を完成させるために特別総合実験・演習科目を開講している。	年１回（11 月）、研究成果をポスター形式で発表させている。 講義ごと、教員ごと対するアンケートを実施することで、学生の要望に応え就学意欲が増す講義に改善してく機会を持っている。	シラバスに則した講義を行い、授業記録をとり適切な成績評価・単位認定を行っている。 研究室の全教員による複数指導を行っている。	少人数の講義を実施し、学生個々の習熟度を把握している。 プレゼンテーション技術演習等演習科目ではアクディブラーニングを実施し、コミュケーションを通じた学習成果の把握をしている。 修士論文の中間発表会に他の専攻の教員に参加してもらい、質問に対する答え方で習熟度を把握している。	定期的なゼミ及び中間報告会で、指導教員全員が全て学生の研究内容と進捗を把握している。 授業･研究室アンケートにより教育内容の適切性を点検している。 複数指導により教員間で学生の習熟度を把握し討論している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 自分の研究の進捗状況を把握し、第三者の意見を聞く事ができる。	【長所】 学生の受講状況を把握できる。 講義内容を教員全員が把握できる。	【長所】 学生のまとめるチカラ、質問力、回答力が涵養される	【長所】 学生の習熟度に沿った指導を施せる。
	【特色】 ・食品と香料および化粧品に関する実践的な専門知識を身につける事ができる。	【特色】 他分野における研究の動向を知る事ができる	【特色】 なし	【特色】 第三者に研究内容を理解させ疑問に応答する能力を身につけることができる。	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 効果の波及として、ポスター発表を見る事のできる学部生が限られている。	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 ・産業界のニーズに則した講義科目の設定	【課題】 アンケート内容を教育に反映する方法	【課題】 異分野の研究に対する学生と教員の理解度の充実	【課題】 専門以外の関連分野に関する知識の習熟度の把握	【課題】 学生ごとの習熟度の詳細な把握
根拠資料名	学修のてびき・講義要項＜シラバス＞	授業・研究室アンケート	授業記録	修士論文、発表ポスター	授業・研究室アンケート（指導に対する満足度など）

2020（令和２）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	□　行っている ☑　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	受験希望者は指導教授と面談し、専攻の受け入れ方針、入学後の研究計画等について確認している。 英語については学部講師による受験準備のための指導を内外受験者向けに行い、公平性を担保している。 指導教授予定者を含めた複数人による学科試験（外国語・専門科目）を実施している。 口述試験を行い、受験者の専攻に対する理解度および入学後の研究内容を指導教授全員が把握している。	大学院入学後の修学状況、学位論文の進捗状況及び修了後の進路決定状況等の分析、入学選抜の適切性を専攻教員で共有している（専攻会議）。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・面談と口述試験で受験者の背景を知る事により、入学後に学生の長所を活かした指導を行う事ができる。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・受験準備のための英語指導に受験者全員が参加できる。	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・学科の研究室再編に伴う専門科目試験課題の設定	【課題】 ・入学試験問題の妥当性の検証、学生の習熟度の把握と改善方法の統一
根拠資料名	東京農業大学大学院募集要項 口述試験回答用紙	専攻会議議事録

2020（令和２）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☐　している ☑　一部している ☐　していない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☐　つなげている ☑　一部つなげている ☐　つなげていない	☐　行っている ☑　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	編制方針を専攻会議において教員間で論議し共有している。 外部には、教員募集の際に方針を踏まえた内容を大学ホームページに掲出している。	大学院設置基準及び学内の教員枠を踏まえ、方針に基づく教員を配置している。	教員の採用は一般公募とし、大学のホームページおよび JREC-IN にて募集している。 採用にあたっては、専攻による選考試験のほか、資格審査委員会において専門性と職階による教育研究業績基準に照らし合わせた厳格な審査をしている。	アンケート形式による自己教育評価を実施している（大学全体）。 学生による評価（授業・研究室）を毎年度実施し、これにもとづく改善を教員に求めている。特に改善を要する事項については、改善計画書を作成している。	専攻会議において人事計画（指導教授や指導准教授への昇格・採用等）を立案し、専攻会議等の中で確認・共有している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・授業および研究室アンケートにより改善すべき点を検討できる。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・生物資源の利用に関する高度な知識を持ち、研究を実践できる教員で編制されている。	【特色】 ・食品、香り、化粧品それぞれを専門とした教員を配置している。	【特色】 ・異分野の専門家で構成される資格審査委員会により、多岐にわたる専門性に対応できる審査を実施している。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・情報の発信方法の充実	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・教員の資質が向上したかどうかの客観的判断	【問題点】 ・産業界の要望に則した教員配置。
	【課題】 ・SNS の作成（発信情報の範囲）	【課題】 ・専門以外の分野に関する理解度の向上	【課題】 ・専門分野に応じた適正な審査基準の設定	【課題】 ・学生に対するアンケート項目の設定 研究業績の整理	【課題】 ・産業界とのつながりの増強
根拠資料名	専攻の教員編制方針 大学ホームページ教員採用欄	大学院案内	資格審査委員会資料	自己教育評価のアンケート 授業・研究室アンケート	大学院案内

2020（令和 2）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　生物産業学研究科
学部長・研究科委員長名　塩本　明弘
学科名・専攻名　産業経営学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	専門分野への学識を深め、コミュニケーション能力を増強するためにフィールドワークを重視し、ヒアリングや実態調査を遂行するための方法を伝えている。	ポスター発表会など、定期的に報告会を行い、忌憚のない意見交換を行っている。	科目ごとに授業記録を取ることにより適切な評価と単位認定を行うとともに、複数人体制による論文指導を行っている。	研究テーマに関連した研究会や国内での学会への参加をさせて発表させるようにしている。	研究成果の報告をするため、学会等の情報を提供している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 基礎となる学科の学びをベースに、産業経営学を文理融合の教育体系から学ぶことができる。	【長所】 専門家以外にどのように自分の成果を理解してもらえるかの練習となる。 社会人の受入拡大と、幅広い学生の研究活動や専門性の取得ができる。	【長所】 受講者が毎回変わるので、調査などで受講できなった者には補講も可能となる。 教員がどのようなことを教えたのかの記録となり、教育効果を把握しやすい。	【長所】 修士論文に関係する内容が、実際へ適用される可能性など社会貢献の意味合いも期待できる。	【長所】 現状把握ができ、標準修業年限（2 年間）での修士取得につながる。
	【特色】 雄大な自然を有するオホーツクにおいて、生産、加工、流通・ビジネスを高度に学ぶことができる。	【特色】 大学院を修了し、社会に出た場合、多くの方に自らの考えを理解させる能力が養える。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 研究の進捗だけでなく、修士取得後の進路や学生生活面など、多面的な学生指導が可能となる。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 ポスター発表は通常の授業時間帯において実施しているので、すべての学部学生や教員が参加できない。	【問題点】 教員の業務負担が増加している。	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 文理融合の教育成果が学生に身に付いているかの評価を、どのようにして把握することができるか。	【課題】 より多くの学部学生と教員が参加するにはどうすればよいか。	【課題】 仕組みの標準化と効率化を図りつつ、事務部による支援体制を強化する。	【課題】 学会に参加する場合の旅費等をどのように工面するか。	【課題】 専攻や指導教授だけなく、学生教務課やキャリア課等事務部の協力が必要となる。
根拠資料名	学修のてびき・講義要項＜シラバス＞	成果発表会のポスター 博士後期課程研究支援制度の募集案内 学則等の規程	講義要項（シラバス）	大学院事業報告 掲載学術論文	院生との面談記録

2020（令和 2）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	□　行っている ☑　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	受験希望者は必ず指導教授（予定者）と事前に面談し、受け入れ方針や入学後の研究計画等について確認している。 指導教授予定者を含めた複数人による学科試験問題（外国語・専門科目）を実施するとともに、指導教員全員による口述試験を行い、公正に入学者を選抜している。 研究科で統一した合否基準を設定し、専攻での合否判定を踏まえ生物産業学研究科委員会において最終的な合否判定をしている。	専攻主任会議において、今後、大学院入学後の修学状況、修士論文の進捗状況及び修了後の進路決定状況等を分析し、入学選抜の適切性やアドミッションポリシーを継続的に点検する必要性を確認した（今後の課題）。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 学生が指導を受ける指導教授が中心となって学科試験問題を作成するので、より専門的な内容の理解を問うことができる。	【長所】 なし
	【特色】 口述試験では様々な専門の指導教授があたるので、受験する学生の幅広い知識やコミュニケーション能力をみることができる。	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 試験を国内の複数個所で受けることができる仕組みの構築 国外（台湾）への大学院生募集案内の周知	【課題】 現状分析の手法及び点検・評価から改善までの仕組み（PDCA サイクル）を制度（委員会設置等）として構築する必要がある。
根拠資料名	東京農業大学大学院募集要項 東京農業大学大学院ホームページ	なし

2020（令和 2）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☐　つなげている ☑　一部つなげている ☐　つなげていない	☐　行っている ☑　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	研究科及び専攻ごとに編制方針を定め、これを専攻主任会議及び専攻会議等にて全構成員に周知している。 外部には、教員募集の際に本方針を踏まえた内容を大学ホームページに掲出している。	大学院設置基準及び学内の教員枠を踏まえ、方針に基づく教員を配置している。	教員採用は一般公募として、大学のホームページ、JREC-IN で募集情報を掲示している。採用にあたっては、専攻による選考試験のほか、資格審査委員会において専門性と職階による教育研究業績基準に照らし合わせた厳格な審査をしている。昇格等は自己申請を基本とするが、大学の定める審査基準により公正かつ厳格に実施している。	大学全体でアンケート形式による自己教育評価と学生による評価（授業・研究室）を毎年度実施し、これをフィードバックするとともに、特に改善を要する事項については、改善計画書を求めている。	専攻における人事計画（指導教授、指導准教授や指導補助教員への昇格・採用等）を専攻主任が中心となって立案し、これを専攻会議等の中で確認・共有している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 改善すべき目標を具体的に把握することができる。	【長所】 なし
	【特色】 オホーツク地域の特色・強みを活かすことのできる業績・考えを持った教員であること。	【特色】 なし	【特色】 資格審査委員会により、多岐にわたる専門性に対応できる審査を実施している。	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 教員個人の目標設定にはなっているが、組織としての目標にどうつなげるか。	【問題点】 人事構成は専攻に依存しており、組織的な確認が十分とはいえない。
	【課題】 なし	【課題】 授業や指導に携わる全教員が指導教授、指導准教授や指導補助教員となること。	【課題】 資格審査基準の定期的な見直しと、専門分野に応じた適正な基準づくり。	【課題】 大学院 FD 委員会による組織的な教員組織の改善に向けた仕組みと、教員個人の改善計画をリンクさせる。	【課題】 専攻、研究科、事務部が連携したチェック体制の構築。
根拠資料名	研究科及び専攻の編制方針 教員募集に係る大学ホームページ	大学院案内	資格審査委員会資料	自己教育評価のアンケート 授業・研究室アンケート	大学院案内

2020（令和 2）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　生物産業学研究科
学部長・研究科委員長名　塩本　明弘
学科名・専攻名　生物産業学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	研究の立案、実施、考察、文献検索などを実施して博士論文を完成させるために研究指導科目として特別総合実験・演習を開講している。	・毎年１回、11 月に研究成果のポスター発表会を実施している。今年度はコロナの影響を考慮してオンラインで実施した。 ・学内に博士後期課程の学生を対象にした競争的資金制度を設けている。 ・秋入学及び長期履修制度を導入している。	科目ごとに授業記録を取ることにより適切な成績評価・単位認定を行うとともに、複数人体制による論文指導を行っている。	試験等による評価とあわせ、教員の指導に従い、一定レベルの研究成果を得て国内外の学会で発表し、学術誌に論文として掲載させること等により評価している。	博士論文を取得するには、学術論文が 2 報必要である。このため、博士後期課程の学生には専攻の主任を交えて、論文の掲載状況等について面談・指導を行い、面談シートに記録している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 前期課程の専門知識をベースに、博士後期課程で生物産業を文理融合の教育体系から学ぶことができる。	【長所】 専門家以外にどのように自分の成果を伝え、理解してもらえるかの練習となる。 研究計画の立案、研究資金の獲得の練習となる。 社会人の受入拡大と、研究活動を中断せず海外での体験や学びができる。	【長所】 受講者が毎回わかるので、調査などで受講できなった者には補講も可能となる。 教員がどのようなことを教えたのかの記録となり、教育効果を把握しやすい。	【長所】 国際学会での報告や国際誌への論文の掲載がみられる。 学会において受賞するなど、学生の意欲向上につながる。	【長所】 現状把握ができ、標準修業年限（3 年間）での学位取得につながる。 博士論文に遅延が生じた場合の原因解明とその対応に役立つ。
	【特色】 雄大な自然を有するオホーツクにおいて、生産、加工・利用、流通・ビジネスを高度に学ぶことができる。	【特色】 大学院を修了し、社会に出た場合、多くの方に自らの考えを伝え、理解させる能力が養える。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 研究の進捗だけでなく、学位取得後の進路や学生生活面など、多面的な学生指導が可能となる。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 ポスター発表会は通常の授業時間帯において実施しているので、すべての学部学生や教員が参加できない。	【問題点】 教員の業務負担が増加している。	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 文理融合の教育成果が学生に身に付いているかの評価をどのようにするか。	【課題】 ・より多くの学部学生と教員が参加するにはどうすればよいか。 ・オンラインによる発表技術の習得・向上。	【課題】 仕組みの標準化と効率化を図りつつ、事務部による支援体制を強化する。	【課題】 すべての学生に研究発表や論文作成の意欲を常に持たすにはどうするか。	【課題】 ・専攻や指導教授だけなく、学生教務課やキャリア課等事務部とのさらなる協力が必要となる。 ・コロナの影響のため面談・指導が十分にできなかった。オンラインによる面談・指導の検討が必要である。

2020（令和 2）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

根拠資料名	学修のてびき・講義要項＜シラバス＞	成果発表会のポスター 博士後期課程研究支援制度の募集案内 学則等の規程	授業記録 指導教授名簿	大学院事業報告 掲載学術論文	院生との面談記録

2020（令和 2）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☐　行っている ☑　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	受験希望者は必ず指導教授（予定者）と事前に面談し、受け入れ方針や入学後の研究計画等について確認している。 指導教授予定者を含めた複数人による学科試験問題（外国語・専門科目）を実施するとともに、本研究科指導教授全員による口述試験を行い、公正に入学者を選抜している。 研究科で統一した合否基準を設定し、専攻での合否判定を踏まえ生物産業学研究科委員会において最終的な合否判定をしている。	大学院入学後の修学状況や学位論文の進捗状況を把握し、修了後の進路決定状況等を調査している。得られた結果を、入学選抜の適切性やアドミッションポリシーを継続的に点検するために活用することは専攻主任会議で確認しているものの、どのように実行するかについては今後の課題となっている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 学生が指導を受ける指導教授が中心となって学科試験問題を作成するので、より専門的な内容の理解を問うことができる。	【長所】 なし
	【特色】 口述試験では様々な専門の指導教授があたるので、受験する学生の幅広い知識やコミュニケーション能力をみることができる。	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 ・外国における現地入試の実施等の対応を検討する必要がある。 ・今年度のように感染症などの影響により対面式の入試ができない場合、どのように実施するかの検討が必要である。	【課題】 現状分析の手法及び点検・評価から改善までの仕組み（PDCA サイクル）を制度（委員会設置やマニュアル化等）として構築する必要がある。
根拠資料名	東京農業大学大学院募集要項 東京農業大学大学院ホームページ	なし

2020（令和 2）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	□　つなげている ☑　一部つなげている □　つなげていない	□　行っている ☑　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	専攻ごとに編制方針を定め、これを専攻主任会議及び研究科委員会等にて全構成員に周知している。 外部には、教員募集の際に本方針を踏まえた内容を大学ホームページに掲出している。	大学院設置基準及び学内の教員枠を踏まえ、方針に基づく教員を配置している。	教員の採用は広く一般公募とし、大学のホームページにて募集している。 採用にあたっては、専攻による面接のほか、資格審査委員会において専門性と職階による教育研究業績基準に照らし合わせた厳格な審査をしている。	大学全体でアンケート形式による自己教育評価と学生による評価（授業・研究室）を毎年度実施し、これをフィードバックするとともに、特に改善を要する事項については、改善計画書を求めている。	専攻における人事計画（指導教授、指導准教授や指導補助教員への昇格・採用等）を専攻主任が中心となって立案し、これを専攻会議等の中で確認・共有している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 改善すべき目標を具体的に把握することができる。	【長所】 なし
	【特色】 オホーツク地域の特色・強みを活かすことのできる業績・考えを持った教員が多数である。	【特色】 博士前期課程は 4 専攻に分かれているが、博士後期課程は 1 つに統合されており、幅広い課題に対応可能である。	【特色】 資格審査委員会により、多岐にわたる専門性に対応できる審査を実施している。	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 教員個人の目標設定にはなっており、専攻や研究科としてどうつなげるか。	【問題点】 人事構成は専攻に依存しており、組織的な確認が十分ではない。
	【課題】 なし	【課題】 授業や論文指導に携わる全教員が指導教授、指導准教授や指導補助教員となること。	【課題】 資格審査基準の定期的な見直しと、専門分野に応じた適正な基準づくり。	【課題】 大学院 FD 委員会による組織的な教員組織の改善に向けた仕組みと、教員個人の改善計画をリンクさせる。	【課題】 専攻、研究科、事務部が連携したチェック体制の構築。
根拠資料名	研究科及び専攻の編制方針 教員募集に係る大学ホームページ	大学院案内	資格審査委員会資料	自己教育評価のアンケート 授業・研究室アンケート	大学院案内

2020（令和２）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名	生物産業学研究科
学部長・研究科委員長名	塩本　明弘
学科名・専攻名	生物生産学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	■現行カリキュラムの点検・改正 本専攻は令和４年度に北方圏農学科に名称を変更する。現行カリキュラムの問題点等を抽出・把握し、ディプロマポリシー（見直しも想定して）に掲げる人材を輩出するという視点により、北方圏の動植物資源の利用と生態系保全、それらを活用するバイオテクノロジー研究を重視した、学修効率の良い魅力のある大学院専攻カリキュラムを策定、令和５年度の学則改正を目指す。
実行サイクル	3 年サイクル（令和２年～4 年）
実施 スケジュール	＜令和２年度＞ ・専攻内における現二分野体制(植物資源生産学分野と動物資源生産学分野)の見直し（～3 月） ・現行カリキュラムの点検→問題点等抽出（～3 月）
目標達成を測定する指標	＜令和２年度＞ ・カリキュラム改正に向けたロードマップ作成 ・現行カリキュラムの問題点等のリストアップ
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	専攻名称を北方圏農学専攻に変更となる（令和４年度入学から）。 専攻カリキュラムに関しては令和４年度の学則改正を目指し、現行カリキュラムの問題点を抽出した。 カリキュラム改定を見越して入試出題科目の名称を変更、本年度から新名称で出題した。入試出題者の見直しを行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 名称変更により基礎学科との連続性が強調されるとともに、専攻の教育内容についてのより具体的に説明できるようになった。 分野の柱科目の履修により、研究の専門性に偏らない幅広い知識を得、選択科目の履修により専門的な知識を得ることができる配置になっている。
	【特色】特になし。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 現専攻カリキュラムは２分野（植物資源生産と動物資源生産）体制となっている。基礎学科では３分野（植物生産、動物生産、フィールド生物資源保全）体制の下でカリキュラムが構成されている。生物資源保全を１分野として独立すべきか。
	【課題】 フィールド生物資源保全分野は、教員３名で構成され、指導准教授１名である。生物資源保全を独立し１分野野生動物と野生植物（環境）をカバーするには、教員が少ない。現在議論中である。
根拠資料名	専攻主任会議資料

2020（令和２）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	■重点的研究領域の強化 専攻の特色や優位性を強化するため「研究室・分野横断型のプロジェクト研究」を設定し、大学院指導教員を主体とした研究組織・研究計画を策定するとともに、総合研究所の研究プロジェクト（学内）または公的・民間等の競争的研究資金（学外）へ応募、採択を目指す。
実行サイクル	3 年サイクル（令和２年～4 年）
実施 スケジュール	＜令和２年度＞ ・専攻の研究分野における強み・弱み等の把握（～8 月） ・重点的領域研究のテーマ設定（～10 月） ・学内外の公募型研究プロジェクト等のリサーチ、申請等準備（～2 月）
目標達成を測定する指標	＜平成２年度＞ ・専攻の研究分野における現状分析結果 ・プロジェクト参画教員・大学院生数 ・学内外の公募型研究プロジェクト応募に向けたロードマップ作成
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学内プロジェクトの継続課題（大学戦略プロジェクト２件、学部長主導型研究プロジェクト１件） 学内プロジェクトの新規課題（大学院先導的実学研究プロジェクト１件、農研機構マッチングファンド型研究１件） R3 年度科研費申請件数：4 件、（加えて今年度新規採択 2 件、継続課題複数件）
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 積極的な競争的研究資金へのアプローチ
	【特色】 研究科横断プロジェクトや他機関とのプロジェクトなどを積極的に展開していること。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし
	【課題】 新規プロジェクト立案
根拠資料名	研究科委員会会議資料 専攻主任会議資料

2020（令和２）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

３．その他に関する総合的事項

	①
目　標	■優秀かつ多様な学生確保に向けた取り組み 専攻のアドミッションポリシーに基づき、意欲的な人材の確保（定員充足）を目的とし、特に基礎学科からの進学率向上を目指して研究科で実施している合同入試説明会・相談会等に加え、専攻独自の取り組みとして以下の活動を実施し、学部と大学院の交流を活発化する。 ・キャリアデザインの一環として基礎学科１年生への大学院説明会 ・外部講師を招聘した先端的セミナーの開催を企画し、広く聴講を呼びかけ、アカデミックな環境を醸成する。 ・基礎学科１年生の研究室訪問による交流。
実行サイクル	3 年サイクル（令和２年～4 年）
実施 スケジュール	＜令和２年度＞ ・主事 WG を主体とした課題設定、スケジュール等調整（～7 月） ・これまでの広報・募集活動（入試説明会、進学相談会、フレッシュマンセミナー）の検証（～10 月） ・次年度広報・募集活動計画の立案（～3 月）
目標達成を測定する指標	＜令和２年度＞ ・現行実施の広報関係企画の評価結果 ・次年度広報・募集活動計画策定 ・令和２年度入試志願者状況（人数、レベル、社会人数等）
自己評価 （☑を記入）	☑　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	進学相談会の実施（年二回）(6 月 16 日 WEB 開催と 11 月 9 日 WEB 開催) フレッシュマンセミナーにおける大学院案内の実施（11 月 9 日オンライン配信型）
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 大学院について学部１年生から広く認知してもらう。特に女子学生への進学啓発を意識して行っている。
	【特色】大学院進学者を増やすためのみでなくキャリアパスとして、研究を理解してもらう工夫をしている。特に女子学生への進学啓発を意識し女性教員から自身の経験を語ってもらっている。大学院希望を持てるように卒業生の様々な活動を紹介している。授業後のアンケートでも高評価が得られた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし
	【課題】アンケート内容を分析、次年度の取り組みにフィードバックする
根拠資料名	専攻主任会議資料　授業アンケート結果（担当者保管　FORMS で収集）

2020（令和２）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　生物産業学研究科
学部長・研究科委員長名　塩本　明弘
学科名・専攻名　アクアバイオ学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	■現行カリキュラムの点検・改正 令和３年度に専攻名を変更予定である。名称変更と合わせ、現行カリキュラムの問題点等を抽出し、本専攻で掲げるディプロマポリシーを達成すべく、カリキュラムの改正を行う。カリキュラムの改正内容によっては現行の分野体制の検討も行う。
実行サイクル	3 年サイクル（令和２年～4 年）
実施 スケジュール	＜令和２年度＞ ・現行カリキュラムの点検、問題点の抽出（４月～３月） ・カリキュラム改正に向けての原案検討（１２月～３月） ・専攻内における分野体制の検討（～３月）
目標達成を測定する指標	＜令和２年度＞ ・現行カリキュラムの問題点の抽出 ・カリキュラム改正のロードマップ作成
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	専攻名称を海洋水産学専攻に変更となる（令和４年度入学から）。 専攻名称改正にあわせ、現行カリキュラムの問題点を抽出した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 専攻名称の変更により基礎学科との連続性が示され、継続的な研究体制が明示されることとなった。
	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし
根拠資料名	専攻主任会議資料

2020（令和２）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	■重点的研究領域の強化 専攻の特色や優位性を強化するため「研究室・分野横断型のプロジェクト研究」を設定し、大学院指導教員を主体とした研究組織・研究計画を策定するとともに、総合研究所の研究プロジェクト（学内）または公的・民間等の競争的研究資金（学外）へ応募、採択を目指す。
実行サイクル	3 年サイクル（令和２年～4 年）
実施 スケジュール	＜令和２年度＞ ・専攻の研究分野における強み・弱み等の把握（～8 月） ・重点的領域研究のテーマ設定（～10 月） ・学内外の公募型研究プロジェクト等のリサーチ、申請等準備（～2 月）
目標達成を測定する指標	＜平成２年度＞ ・専攻の研究分野における現状分析結果 ・プロジェクト参画教員・大学院生数 ・学内外の公募型研究プロジェクト応募に向けた目標作成
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	（学内）総合研究所の研究プロジェクト　継続１件 （学外）科学研究費継続３件、競争的研究費２件、委託研究８件
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 特になし
	【特色】 オホーツク周辺の漁業資源に関する委託研究が多い
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 委託研究は多いものの、競争的研究費獲得が少ない傾向がみられる。
	【課題】 競争的研究費に積極的に応募できるような体制作りが必要
根拠資料名	令和元年度大学院事業概要

2020（令和２）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

３．その他に関する総合的事項

	①
目　標	■優秀かつ多様な学生確保に向けた取り組み 専攻のアドミッションポリシーに基づき、優秀な学部生および社会人等の多様な人材を確保して定員充足するために、研究科で実施している合同入試説明会・相談会等に加え、専攻独自の取り組みとして以下の広報・募集活動を実施する。 ・教育・研究室活動において機会を積極的に捉え、大学院入学への啓発を行うとともに、学会発表や HP などにより、本専攻の教員および大学院生が実施している研究の魅力の発信を行う。 ・学科１年生への大学院の説明や研究室訪問をうながす
実行サイクル	3 年サイクル（令和２年～4 年）
実施 スケジュール	＜令和２年度＞ ・主事 WG を主体とした課題設定、スケジュール等調整（～7 月） ・これまでの広報・募集活動（入試説明会、進学相談会、フレッシュマンセミナー）の検証（～10 月） ・次年度広報・募集活動計画の立案（～3 月）
目標達成を測定する指標	＜令和２年度＞ ・専攻紹介のパワーポイント作成 ・次年度広報 ・令和２年度入試志願者状況（1 期：2 名（6 名受験）、2 期：2 名（4 名受験））
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・専攻紹介のパワーポイント作成 ・次年度広報 ・令和２年度入試志願者状況（1 期：2 名（6 名受験）、2 期：2 名（4 名受験））
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 学生の現状に則したカリキュラム
	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 大学院受験者の合格率のアップ
	【課題】 大学院受験予定者への指導
根拠資料名	研究科委員会会議資料 専攻主任会議資料

2020（令和２）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　生物産業研究科
学部長・研究科委員長名　塩本　明弘
学科名・専攻名　食品香粧学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	□　講じている ☑　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	□　行っている ☑　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	香粧品と食品に関する最新の知識を教授するため、トピックスを交えた特論科目を配置している。 コミュニケーション能力を養うための学会発表法を教授する科目を開講している。研究の立案、実施、考察、文献検索などを実施して修士論文を完成させるために特別総合実験・演習科目を開講している。	年１回（11 月）、研究成果をポスター形式で発表させている。 講義ごと、教員ごと対するアンケートを実施することで、学生の要望に応え就学意欲が増す講義に改善してく機会を持っている。	シラバスに則した講義を行い、授業記録をとり適切な成績評価・単位認定を行っている。 研究室の全教員による複数指導を行っている。	少人数の講義を実施し、学生個々の習熟度を把握している。 プレゼンテーション技術演習等演習科目ではアクディブラーニングを実施し、コミュケーションを通じた学習成果の把握をしている。 修士論文の中間発表会に他の専攻の教員に参加してもらい、質問に対する答え方で習熟度を把握している。	定期的なゼミ及び中間報告会で、指導教員全員が全て学生の研究内容と進捗を把握している。 授業･研究室アンケートにより教育内容の適切性を点検している。 複数指導により教員間で学生の習熟度を把握し討論している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 自分の研究の進捗状況を把握し、第三者の意見を聞く事ができる。	【長所】 学生の受講状況を把握できる。 講義内容を教員全員が把握できる。	【長所】 学生のまとめるチカラ、質問力、回答力が涵養される	【長所】 学生の習熟度に沿った指導を施せる。
	【特色】 ・食品と香料および化粧品に関する実践的な専門知識を身につける事ができる。	【特色】 他分野における研究の動向を知る事ができる	【特色】 なし	【特色】 第三者に研究内容を理解させ疑問に応答する能力を身につけることができる。	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 効果の波及として、ポスター発表を見る事のできる学部生が限られている。	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 ・産業界のニーズに則した講義科目の設定	【課題】 アンケート内容を教育に反映する方法	【課題】 異分野の研究に対する学生と教員の理解度の充実	【課題】 専門以外の関連分野に関する知識の習熟度の把握	【課題】 学生ごとの習熟度の詳細な把握
根拠資料名	学修のてびき・講義要項＜シラバス＞	授業・研究室アンケート	授業記録	修士論文、発表ポスター	授業・研究室アンケート（指導に対する満足度など）

2020（令和２）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	□　行っている ☑　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	受験希望者は指導教授と面談し、専攻の受け入れ方針、入学後の研究計画等について確認している。 英語については学部講師による受験準備のための指導を内外受験者向けに行い、公平性を担保している。 指導教授予定者を含めた複数人による学科試験（外国語・専門科目）を実施している。 口述試験を行い、受験者の専攻に対する理解度および入学後の研究内容を指導教授全員が把握している。	大学院入学後の修学状況、学位論文の進捗状況及び修了後の進路決定状況等の分析、入学選抜の適切性を専攻教員で共有している（専攻会議）。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・面談と口述試験で受験者の背景を知る事により、入学後に学生の長所を活かした指導を行う事ができる。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・受験準備のための英語指導に受験者全員が参加できる。	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・学科の研究室再編に伴う専門科目試験課題の設定	【課題】 ・入学試験問題の妥当性の検証、学生の習熟度の把握と改善方法の統一
根拠資料名	東京農業大学大学院募集要項 口述試験回答用紙	専攻会議議事録

2020（令和２）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☐　している ☑　一部している ☐　していない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☐　つなげている ☑　一部つなげている ☐　つなげていない	☐　行っている ☑　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	編制方針を専攻会議において教員間で論議し共有している。 外部には、教員募集の際に方針を踏まえた内容を大学ホームページに掲出している。	大学院設置基準及び学内の教員枠を踏まえ、方針に基づく教員を配置している。	教員の採用は一般公募とし、大学のホームページおよび JREC-IN にて募集している。 採用にあたっては、専攻による選考試験のほか、資格審査委員会において専門性と職階による教育研究業績基準に照らし合わせた厳格な審査をしている。	アンケート形式による自己教育評価を実施している（大学全体）。 学生による評価（授業・研究室）を毎年度実施し、これにもとづく改善を教員に求めている。特に改善を要する事項については、改善計画書を作成している。	専攻会議において人事計画（指導教授や指導准教授への昇格・採用等）を立案し、専攻会議等の中で確認・共有している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・授業および研究室アンケートにより改善すべき点を検討できる。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・生物資源の利用に関する高度な知識を持ち、研究を実践できる教員で編制されている。	【特色】 ・食品、香り、化粧品それぞれを専門とした教員を配置している。	【特色】 ・異分野の専門家で構成される資格審査委員会により、多岐にわたる専門性に対応できる審査を実施している。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・情報の発信方法の充実	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・教員の資質が向上したかどうかの客観的判断	【問題点】 ・産業界の要望に則した教員配置。
	【課題】 ・SNS の作成（発信情報の範囲）	【課題】 ・専門以外の分野に関する理解度の向上	【課題】 ・専門分野に応じた適正な審査基準の設定	【課題】 ・学生に対するアンケート項目の設定 研究業績の整理	【課題】 ・産業界とのつながりの増強
根拠資料名	専攻の教員編制方針 大学ホームページ教員採用欄	大学院案内	資格審査委員会資料	自己教育評価のアンケート 授業・研究室アンケート	大学院案内

2020（令和 2）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名	生物産業学研究科
学部長・研究科委員長名	塩本　明弘
学科名・専攻名	産業経営学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	■教育カリキュラムの改善に向けた検討 2019 年度のカリキュラム改正による教育研究活動の実施状況と効果を検証し、次期のカリキュラム改正に向け、専攻のカリキュラムポリシーを実現しうる設置すべき科目について検討する。また、実学を重視した学科の特色・専門性を活かせる魅力的なフィルドワークや体験重視のプログラムを検討する。生態系循環エコアグリフードシステムを基軸とした教育カリキュラムへの改正に向けて、学部共通の学科横断的体験型プログラム等を踏まえ、その中で、環境共生と経営の統合と自然資源の経営を展望した総合的な学びに重点を置いた専攻の特色・専門性をより活かせる専門カリキュラムを策定する。
実行サイクル	3 年サイクル（2020 年～2022 年）
実施 スケジュール	＜令和 2 年度＞ WG による課題設定、スケジュール等調整（通年） 教学検討委員会の方向性、教職課程再課程認定への影響等、前提条件の整理及び共有（～8 月） WG 学科委員を中心に学科専門カリキュラムの検討（通年）
目標達成を測定する指標	＜令和 2 年度＞ 産業経営学専攻カリキュラムの策定 学則改正案（カリキュラム）の作成
自己評価 （☑を記入）	□　達成した □　一部達成した ☑　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍のため、フィルドワークや体験重視のプログラム実施への影響があった。環境共生を配慮した環境ビジネスの在り方、地域活性化の視点に基づいた現地調査に基づく実学的な視点での教育カリキュラム体制を実施、修論作成に向けての研究発表会を通じて、大学院生間の交流や情報共有を展開した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 現地調査による現状把握、さらに社会人の経験を共有することができる。
	【特色】 現場体験から問題意識の醸成と学習の動機付け、意欲の向上が図れる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 オホーツク地域の特色・強み（同系他大学から見た優位性、流氷の継続的観測ができる日本で唯一の大学）を活かした専門科目を設定することで地域の活性化に資することが期待される。
	【課題】 論文を作成した経験を活かすことで、社会人であれば現状の体系化を図れるようにすることと、就職へさらに活かすことができる仕組みの構築が課題である。
根拠資料名	

2020（令和 2）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	■地域創生・地域振興にかかわる研究プロジェクトの実施 研究室および教員の知財の活用、また他専攻との連携、そして東京農業大学・生物産業学部が締結した産官学金労による多様な包括連携協定なども活用し、地域創生・地域振興に資する研究プロジェクトを企画・実施する。また、この研究成果を学科の学生教育及び地域・社会等に広く還元する。
実行サイクル	3 年サイクル（2020 年～2022 年）
実施 スケジュール	WG による課題設定、スケジュール等調整（通年） 教学検討委員会の方向性、教職課程再課程認定への影響等、前提条件の整理及び共有（～8 月） WG 学科委員を中心に学科専門カリキュラムの検討（通年）
目標達成を測定する指標	産業経営学専攻カリキュラムの策定 学則改正案（カリキュラム）の作成
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍のため、フィルドワークや体験重視のプログラム実施への影響があった。環境共生を配慮した環境ビジネスの在り方、地域活性化の視点に基づいた現地調査に基づく実学的な視点での教育カリキュラム体制を実施、修論作成に向けての研究発表会を通じて、大学院生間の交流や情報共有を展開した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 地域貢献を実感できるような仕組みづくりができる。 学生が成果を認識・実感できる。
	【特色】 各種プロジェクトの設定により社会貢献を学生が実感できる仕組みであること。プロジェクト参画企業、団体がプロジェクトに参加する意義があったと実感していただける仕組みづくり。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 プロジェクトにおいて、誰にもわかりやすい成果をあげること。プロジェクトを通じた教員と学生のネットワークを活用した水平的な展開が期待される。
	【課題】 プロジェクト研究に対する学生への積極的な動機付け。
根拠資料名	

2020（令和 2）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

３．その他に関する総合的事項

	①
目　標	■連携協定や共同研究等を活用した研究プロジェクトの実施 産業経営学専攻の専門性を活かした地方活性化するビジネスモデルのシーズを追及する連携研究プロジェクトを関連企業あるいは研究機関と企画・実施するとともに、この研究成果を地域・社会等に広く還元する。
実行サイクル	3 年サイクル（2020 年～2022 年）
実施 スケジュール	具体的取組内容の検討、担当者及び参画教員の選定（必要に応じて） 連携先機関への打診（必要に応じて） 実施に向けた連携先機関とのスケジュール調整（～3 月）
目標達成を測定する指標	連携研究プロジェクトの策定 プロジェクト参画教員数 関連した外部資金への応募・獲得状況
自己評価 （☑を記入）	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学院入試説明会・進学相談会での説明。 大学院説明会における在籍している大学院生の出席など。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 連携先のイベント告知との相互乗り入れが出来る点が長所。
	【特色】 大学の入試広報以外のチャネルを活用した情報発信。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 発信した情報がどのように受け止められているのか不明である。情報の質に関するアセスメントができない。 効果的なチャネルをさらに増やす方策が必要。 受験生漸減を食い止める方策の策定。
	【課題】 効果の計測が充分でない。
根拠資料名	専攻オリジナルパンフレット、イベント企画書・実施要項等。

2020（令和２）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名	生物産業学研究科
学部長・研究科委員長名	塩本　明弘
学科名・専攻名	生物産業学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	■複数指導体制による面倒見のよい教育の推進 博士後期課程入学時に、大学院生と指導教員（場合によっては、指導補助教員、サポート教員を含む）で博士論文完成までのロードマップを作成し、単年度ごとにロードマップをもとに大学院生と面談を行うことにより、博士論文作成の進捗状況を把握する。遅れがある場合には、是正していく。このような過程を経ることにより、既定の３年間で博士論文が完成できるような指導体制作りを目指す。
実行サイクル	3 年サイクル（令和２年～令和４年）
実施 スケジュール	＜令和２年度＞ ・指導教員などの決定（～7 月） ・博士論文作成のロードマップの作成（～9 月） ・博士論文作成の進捗状況把握のための面談内容の検討・作成（～12 月） ・博士論文作成の進捗状況の把握（大学院生との面談）（～3 月）
目標達成を測定する指標	＜令和２年度＞ ・ロードマップの作成 ・面談内容の検討・作成 ・大学院生との面談
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☐　一部達成した ☑　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	複数指導体制の教員を決定することができた。しかしながら、今年度はコロナの影響を受けて、前期は教員、院生ともにキャンパスに入構できず、後期から入構できるようになった。一期の大学院入試がオンラインで実施となったり、例年実施している大学院生のポスター発表会もオンラインとなった。また、大学院に関わる会議がすべてオンラインとなった。これまで経験のなかったオンラインでの様々な対応のため多くの時間を費やすこととなった。このため本課題は一部しか達成できなかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし
	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし
	【課題】 なし
根拠資料名	

2020（令和２）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	■先端性や特色ある研究テーマの継続 本研究科の特色を表すために「自然資源の豊かな地であるオホーツクに根ざしながらも国際的に評価される自然科学並びに社会科学に関する研究」をもとに、各専攻や各研究室における先端性を有して継続すべき研究テーマを実行するための大学院指導教員を主体とした研究組織・研究計画を策定するとともに、学内・学外の競争的研究資金へ応募、採択を目指す。
実行サイクル	3 年サイクル（令和２年～令和４年）
実施 スケジュール	＜令和２年度＞ ・各専攻や各研究室における強み・弱み等の把握（～8 月） ・先端性や特色ある研究のテーマ設定（～12 月） ・学内外の R3 年度競争的資金等のリサーチ、申請等準備（～3 月）
目標達成を測定する指標	＜令和２年度＞ ・各専攻・各研究室における現状分析結果 ・先端性や特色ある研究のテーマ設定 ・学内外の競争的資金への応募に向けたロードマップ作成
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学院指導教授、指導准教授並びに指導補助教員は自らの専門性にとらわれることなく、専攻（専修分野）間を超えて様々な研究を実施し、大学院生も加わっている。 農生命科学研究所の研究プロジェクト（学部長主導型、大学戦略研究プロジェクト、大学院先導的実学研究）に採択され、当研究科の大学院指導教授が研究代表者となっている。 大学院指導教授、指導准教授並びに指導補助教員は科研費を始め、様々な公的・民間等の競争的資金に応募し、採択（研究代表者）もされている。 農生命科学研究所による博士後期課程の学生を対象とした競争的資金制度があり、令和２年度において当研究科の学生は１名採択されている。 専攻主任会議等で学内外のプロジェクト募集についての案内を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 多様な専門性を有した教員から成っているため、学際的で新規性の高い研究プロジェクトを立てやすい。 学際的で新規性も高いことから、競争的資金も採択されやすい。
	【特色】 多様な能力を有した若い研究者を育てることができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 学際的で新規性は高いが、具体的な成果がすぐには得られない場合がある。
	【課題】 学際的で新規性の高い研究テーマは競争的資金の獲得につながっているのか。
根拠資料名	大学院事業概要 東京農業大学農生命科学研究所のホームページ 指導教授並びに指導准教授のホームページ

2020（令和２）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

３．その他に関する総合的事項

	①
目　標	■優秀かつ多様な学生確保に向けた取り組み 専攻のアドミッションポリシーに基づき、優秀で意欲のある博士前期課程修了生や社会人および外国人等多様な人材を確保（定員充足）するために、研究科で実施している合同入試説明会・相談会等に加え、専攻独自の取り組みとして以下の広報・募集活動を実施する。 ・博士後期課程の研究テーマだけではなく、公表した研究論文、学会での発表や受賞歴などを広く周知する。 ・博士後期課程修了（博士論文取得）後の就職先を周知する。 ・英文での募集要項などの充実を図る。
実行サイクル	3 年サイクル（令和２年～令和４年）
実施 スケジュール	＜令和２年度＞ ・課題設定、スケジュール等調整（～8 月） ・これまでの広報・募集活動（入試説明会、進学相談会、フレッシュマンセミナー）の検証（～10 月） ・次年度広報・募集活動計画の立案（～3 月）
目標達成を測定する指標	＜令和２年度＞ ・実施した広報活動等の評価結果 ・次年度の広報・募集活動計画の策定 ・令和３年度入試志願者並びに合格者の状況（人数、レベル、社会人数等）
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・コロナ禍のためオンライン（動画）で大学院生物産業学研究科の進学相談会を実施した。 ・学部卒業生を対象に大学院進学に関するアンケートを実施し、解析した結果、興味のあるテーマを与え、お金（生活費を含む）が工面できれば進学者が増える可能性がみられた。 ・今年度の博士前期課程の入学志願者は 28 人（延べ人数；社会人は１人）、合格者は 18 人（社会人は１人）であり、後期課程の入学志願者は２人（社会人は２人）、合格者は２人(社会人は２人)であった。昨年度に比べて前期課程（前年度の志願者数は 30 人）は微減、後期課程（前年度の志願者は０人）は微増であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・オンラインでの進学相談会は時間や場所が限定されないので、多くの学部学生に大学院について周知することができる。 ・大学院進学を考えなかった理由をアンケートから抽出することができた。
	【特色】 ・オンラインでの相談会は、誰でも、いつでも、どこでも視聴できる。 ・大学院進学を考えなかった理由が明らかとなり、進学者を増やすための改善点が具体的に明らかになってきた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 オンライン（動画）を視聴した学生の質問への回答に少し時間がかかる。
	【課題】 コロナの影響が収まった後、オンラインでの進学相談会を継続するか、否か。
根拠資料名	東京農業大学のホームページ 2021 年１月大学院生物産業学研究科専攻主任会議の資料